



曾野綾子著

『晩年の美学を求めて』を読む

— 読書会では四段階の読み深めを —

呉大学エクステンションセンター

深 川 賢 郎

■ はじめに

読書会で、曾野綾子著『晩年の美学を求めて』¹⁾という本の一節「平々凡々の紆余曲折」という文章を紹介した。一人読みの参考図書として紹介したものであった。数日後、会員の三浦さんから感想の手紙が届いた。感想文をいただくことはあまり例のないことである。曾野綾子氏の文章は、熟考され、話題性にも富んでいたもので、すでに八十歳を超えた三浦さんにとって、読み置くだけでは気がすまないということであったのかもしれない。

三浦さんの感想は、文章の流れを追って、印象に残った部分の引用と、それについての思いが書かれている。読書の深化過程は、一般に素材読み、構造読み、主題読みの三段階を考えるのがふつうである。私もそのように考え、折りに触れて提案した²⁾。

しかし、読書会の深化過程には、この三段階に対してもう一段追加したいプロセスが考えられる。それは、「発展読み」である。

三浦さんにいただいた手紙の内容は、「一読しての感想」とことわられており、初発の感想文として、素材読みの段階と位置づけることができる。折角の機会をいただいたので、「平々凡々の紆余曲折」（以下テキストとよぶ）について読書会の深化過程を改めて考えてみたい。

■ 素材読み

三浦さんは、次のように述べている。

- 「文章も内容も素直に頭に入って、しかも誰にも大切な問題でした。読書会に最適な文章だと思いました。」
- 最初の三行「突然、老年や晩年になるのではない。長い年月の末に、人間はそこに到達するのだ。だとすれば、そうなる前に、人は種を蒔いておかねばならないのではないか。死の前に、自分はどうのような所、どのような風景の中で生きるつもりだったのか、自分で決めておくのが自然であろう」について

私はそんな大局的な生き方はできなくて、今日一日を自分や家族のため精一杯に生きようと心がけてきただけです。しかし、後悔はありません。

p.107「形の足し算の法則があてはまらない、与えるほど増える愛」について
（「形の足し算」というのは、いわゆる算数の単純な足し算のこと）*深川 注

ことばは聖書的ですが、実感いたします。ただし、本当に未だ見たこともない人のために尽くせるか？
ことによって自信がありません。

p.110「我慢して結婚生活を続ける必要はない」について

それは自分の不仲な父母を見て育ったから思うことで、一理ですが、誰にも当てはめるべきではないと思います。我慢が必要です。

p.110ある女性に対して「私は一度だけ、たった一つ頼みごとをした記憶がある」「するとその人は、自分は自由を束縛されることは、一切しないのだ、といった」について

作者の、たった一つの頼みごとを断るのは得策でないと感じるのは、自分の側からの考え方、思い方であると思います。お互いに、人は大なり小なり自分が一番可愛い、自愛心のかたまりではないかと思っています。

p.112「受けて与えてごちゃごちゃになって、何だか知らないけれど人にまみれて生きた、という人生を送って、人は初めて豊かな晩年に到着するように思う」について

誠に同感で、心が充たされました。一回読んだきりの感想ですが、ご判読ください」

テキストを読んでいく順序によって、触発された感想が述べられている。私たちが読書するとき、多くの場合はこのような流れになる。初発の感想ではあるが、大切なポイントは押さえられている。このように、部分部分の表現や事例に反応しながら読み進めるのが素材読みである。

三浦さんの読みには、八十年を闊した人生の裏づけがある。率直で警句のように短い言葉の中に、豊かな背景がうかがわれるけれども、論点からはずれるので、いまは触れないことにする。

この読みをもう一つ深化させるために、私たちは、作品を突き放してまな板に載せ、その内容を吟味する。これが構造読みである。テキストの文章は、エッセイ風に述べられているが、文章の構成を見ると、晩年のあり方について、主題らしきものとその主題の理解を助ける具体例とで成り立っていることが分かる。いわば主題と証明という二つの要素を備えた説得の文章である。

テキストの文章は、そういう意味で「小さな論文」とみなすことができる。

■ 構造読み

構造読みは、文章全体の構造を、段落や中心文などに注目しながら分析し、読み解く段階である。段落のキーとなる中心文、段落と段落の連携の仕方、文章全体の組み立て、表現の背景に託された意味内容などを吟味する。このとき表現内容全体のアウトラインが読み取られる。

そこで、テキストをもとに大切な部分を抜き出しながら、構造的な把握を試みてみよう。

最初に「人は種を蒔いておかねばならないのではないか」とある。つぎに、同じページに「老年の姿は、若いときからの生き方によってかなり違う」と述べ、「生き方の差は将来を決する」と述べられている。ほぼ同じ内容で、若い時代の生き方や心得の大切さが並べられている。晩年の輝きは、若い時代の反映であるという意味が背景に託されている。

つづいて、文章の構成は大きく展開し、「友のために命を捨てること」（聖書）が「限りなく美しい」姿である、と紹介される。この偉大な教えを守ることが、人生では必要であるとして、一つの価値観が考え方の前提として提示される。

では、若者の特権としての、自己中心的な生き方をすることは全くいけないことなのか。読み手は疑問を抱く。この反論や疑問のあることを予想して、明敏な曾野綾子氏は次のように述べている。若い人たちは「取り込む」「もらう」特徴を持っている、と述べ、若者によくある、いわゆる「甘え」を認めている。この部分は、自分が述べようとする内容について「予想される反論に対する備え」の段落である。若者にありがちな傾向を認めなければ議論が一方的になって、弱くなるからである。その上で次のように新しい視点を示す。

「二十歳を過ぎ、三十歳を過ぎ、時には四十代になってもまだ、取り込むことしか知らないで過ごしている」人がある。この部分が次の展開への伏線となる。りんごを二つに二つ足すと四つになる。しかし、「人間関係、つまり愛という不思議なものだけには、この足し算の法則が当てはまらない。〔与えるほど増える〕という足し算である」と展開する。このように手順を踏んで、「友のために命を捨てること」の

大切さにもう一度回帰するのである。自己犠牲は美しい晩年のために大きな必要条件であることが位置づけられる。

筆者はこの前提のうえにたって、二人の人物を紹介する。

一人の男性は、「社会的に見て、功なり名遂げた人であった。しかし、見知らぬ他人には全く関心を持ったこともなく、もちろん金も心も与えなかった」人物である。

「私は生涯国家の世話にはならない」といつていたが、不幸にして腎臓病となり、透析を受けることになってしまった。入院もした。これは相当な費用を要することである。この人は、「国民健康保険を使い、たぶん老人保健も利用したはずである」「なぜかこの人は、成熟しなかった貧しい人生を送った人の典型だったな、と考えるのである」

もう一人の人物は、若いころ筆者と交流のあった人物と思われる女性である。この人は、筆者のたった一回の頼みごと（冷房のきいた部屋で、一日だけ昼食付きの留守番をしてほしいという依頼）を断った。電話番号でもなかった。依頼人（筆者）からすると、のんびりとした役割だと考えられたものである。しかし、その女性は断った。「自由を束縛されることは、一切しないのだ」という理由であった。一切の束縛を拒否するという返事に対して、筆者はいう「できることなら、私自身は、この女性のように一切の望ましくないことにかかわりたくない」

さらに重ねて、曾野綾子氏は自分の父母のことを事例として紹介し、「我慢して結婚生活を続ける必要はない」ということを述べている。「私だって束縛は受けたくない」ということを証明するための事例である。

また、男性のように「国家の世話などになりたくない、と啖呵を切って生きてみたい。しかし、私たちは、人と関わらずには生きられないのである」となっている。このようにして、自己犠牲を受け入れない二人の言い分を際立ったものとしている。

この文章の最後は、全体のまとめとして、一気に次のように締めくくられている。

「そういう人たちは、なぜか例外なく存在感が薄くなってしまって、その人がどこで何をしているかささえもわからない人もいる。私の眼には彼らの老年も消えてしまったようで淋しい」これが事例に取り上げられた二人の「晩年の姿」である。

■ 主題読み

曾野綾子氏の文章は周到に用意され、練られた文章であることがわかる。というのは、「構造読み」で整理したように、

「人は種を蒔いておかねばならないのではないか」

「老年の姿は、若いときからの生き方によってかなり違う」

「生き方の差は将来を決する」

この三つの点が、冒頭の大切なポイントになる。

このテキストを、「私たちが『晩年の美学を求めて』ためには、どのような人生を送ることが必要か」という問題意識を持って読むとすると、この三つのセンテンスが全体の教訓（主題）として受けとめるべき内容であることが分かる。しかし、これでは、あまりに抽象的で、どういう生き方を意味するのか、内容がわからない。

そこで、この主題を証明（具体化）するために、一つの条件が掲げられる。「献身の必要性」である。筆者は二人の生きた姿を事例として紹介した。献身を拒んだ二人のたどった人生は、次のようになっている。

「なぜか例外なく存在感が薄くなってしまって、その人がどこで何をしているかささえもわからない人もいる。私の眼には彼らの老年も消えてしまったようで淋しい」

晩年の美学の視点からすると、吹けば飛ぶような、軽い人生であった。晩年になるほど、生きた証は希薄になっている。言い換えると、晩年の豊饒に見放された、あわれな二人の姿である。

タイトルの「平々凡々の紆余曲折」という命名は、これも何のことだか分かりにくくて、良いタイト

ルとはいいいかねる。しかし、全体を通じて、筆者の言いたかったことをたどると、「私たちは、人と関わらずには生きられないのである」ということに加えて、三浦さんがとらえている「受けて与えてごちゃごちゃになって、何だか知らないけれど人にまみれて生きた、という人生を送って、人は初めて豊かな晩年に到着するように思う」という重要な部分に帰着する。ここまで読むと、このテキストの主題は明白である。

冒頭に示された三行の抽象的な「主題」と、献身の必要性についての提示、それを拒んだ二人の事例による「証明」は、「平々凡々の紆余曲折」に生きることの大切さ、という局所に一体化するのである。巧みな納め方といえる。

■ 発展読み

私も狭い人生経験において、曾野綾子氏のいう自己の保身だけに精力を注いでいる人や、人に奉仕することを極度に嫌う人を見たことがある。こういう人の晩年は貧しく、淋しいものになっていくのであろう。私たちは、みんな未完成で弱い人間である。人との関係性の中で、迷惑をかけたり、かけられたり、助け合いながら生きている。そのように心得て、謙虚に生きるのが晩年を豊かにする生き方である、というのが曾野綾子氏の言いたかったところではないか。このテキストの冒頭が「突然、老年や晩年になるのではない」という書き出しからはじまっているのも暗示的である。

ここまで考えると、「平々凡々の紆余曲折」というタイトルは、作者の生き方の一貫した思いを背負って立つ大切な役割を果たしている。

限られたスペースで、発展読みとしての醍醐味を味わうことは困難であるが、いくつか付け加えておきたい。読んできたテキストは『晩年の美学を求めて』という書名の元に組み込まれているが、この本には、これ以外に二十七のタイトルの文章が収められている。それらの文章からうかがえる「平々凡々の紆余曲折」の内容に関係していると考えられる表現は多い。煩瑣になるので『晩年の美学を求めて』に所載の部分とページだけ抜き出してみよう。

「何もかもきれいに跡形もなく消えるのが、死者のこの世に対する最高の折り目正しさだと私は思っている。…犯罪を犯して記憶されるよりは、悪いこともせずに済んで、誰からも恨まれることなくこの世を去っていきただけで、この上ない成功である。」(p.52)

「人が自分にしてくれることを期待せず、自分が人に尽くしてやることが、大人の人間の目的だったのではないか」(p.79)

ヘブライ学者前島誠氏の言葉『人はいつ完全といえるのでしょうか。自分のありのままを自分で認めたときです。飾らず、恰好つけることなく、そのままの自分を「これがわたしです」と心から言えたとき、その人は完全への道にあるのです』について、「…どのような経過を辿るにせよ、晩年にこうした冷徹な眼ができるとすればすばらしいことである」(p.121)

ニューヨーク大学のリハビリテーション研究所の壁に、一人の患者が書いた落書きがある。それを人々は「患者の祈り」と呼んでいる。それは次のような文言である。

「大事をなそうとして

力を与えてほしいと神に求めたのに

慎み深く従順であるようにと

弱さを授かった

より偉大なことができるように

健康を求めたのに

より良きことができるようにと

病弱を与えられた

幸せになろうとして

富を求めたのに

賢明であるようにと
貧困を授かった
世の人びとの賞賛を得ようとして
権力を求めたのに
神の前にひざまずくようにと
弱さを授かった
人生を享受しようとして
あらゆるものを求めたのに
あらゆることを喜べるようにと
いのちを授かった
求めたものは
ひとつとして与えられなかったが
願いはすべて聞きとどけられた
神のみこころに添わぬ者であるにも
かかわらず
心の中の言い表せない祈りは
すべてかなえられた
私はあらゆる人の中で
最も豊かに祝福されたのだ」

「この思想に世界のあちこちで、多くの人が深く共鳴したということだ。彼らは人生の意味を発見し、納得し、それによって希望や目的を与えられた。」「……人生の意味の発見というもののほど、私には楽しく、眩しく思われるものはない。その発見は義務教育でも有名な大学でも、学ぶことを教えてもらえない。強いて言えば、読書、悲しみと感謝を知ること、利己的でないこと、すべてを楽しむこと、が、そこに到達することに役立つであろう」(p.178～p.181)

冒頭で紹介した三浦さんの文章に「私はそんな大局的な生き方はできなくて、今日一日を自分や家族のため精一杯に生きようと心がけてきただけです。しかし、後悔はありません」という部分がある。

また、テキストの「受けて与えてごちゃごちゃになって、何だか知らないけれど人にまみれて生きた、という人生を送って、人は初めて豊かな晩年に到着するように思う」について、三浦さんは、「誠に同感で、心が充たされました」とあった。わが意を得たりという心境である。

これらの所感には、三浦さんの人生の到達点が端的に表現されている。ここに、三浦さんの、晩年の清澄な心境をうかがうことができる。三浦さんは結婚して、社会に出ることもなく、家庭を守り何人もの子育てをしてきた。戦前を生き、原爆に被災し、戦後の混乱を生きた普通の主婦である。八十数年の人生を経ることで、三浦さんは自らの生き方に処しながら、いま、曾野綾子氏と一致する人生観にいる。「心が充たされました」という表現は、自分が言いたくてたまらない部分を曾野綾子氏が、はからずも代弁してくれていたからであろう。二人は同じ地平をみつめているのである。

読書会では、このような話題に議論がすすむと、あとは土俵がはずされる。土俵がないということは、柔道のように場外無制限ということである。それは脱線ではなく、読みの拡充・発展としての軸の移動である³⁾。

ここで、晩年の生き方に応える一つの書物を上げるとすると、神谷美恵子著『こころの旅』⁴⁾の第八章「人生の秋」に述べられている「第三のコペルニクスの転回」の一節などが候補となるであろう。

それによると、向老期における人間のものの見方として、「自主的に自分なりのペースで『生きる時間』の使い方、配分のしかたを考え、また時間そのものについても洞察を深め、『超時間的に』時間を観ずることができるようになることが望ましい」と述べられている。さらに、「こういう宇宙的時間の永遠性に対する感覚が生まれてくるにしたがって、青年期に垣間みられた第二の転回よりはるかに徹底した第三の転回に行きつくのだろう」とも述べられている。

ここでいわれている「第三のコペルニクスの転回」という意味は、「社会的時間」の束縛からはなれ、永遠を見詰めるという高度な精神世界への開眼を意味していると解釈される。

私たちは、青年期に精神世界の深さを知る。神谷美恵子氏の場合、十代で結核をわずらい、死を覚悟した。死と向き合う療養生活を経て、不思議にも彼女の病気は治癒した。多くの人が死んでいく中で、「なぜ自分だけが」という疑問とともに、「生かされている自分」に託された「使命」を知った。それは「献身」という二文字であった。

その後、東京多摩全生園において、ライ患者との出会いがあった。それは、彼女の人生を揺るがす衝撃と決意をもたらした。「ライのために人生をささげる」、これら一連の流れが彼女の「第二のコペルニクスの転回」である。

青年期にこのような転回を経験していないと、「第三のコペルニクスの転回」の到来は困難かもしれない。ともかく、神谷美恵子氏の言う第三の転回がくると「人間はどれだけのしごとを果したか、ということよりも、おかれたところに素直に存在する『ありかた』のほうが重要性を帯びてくるだろう」ということである。「おかれたところに素直に存在するありかた」というのは、社会的時間やしがらみから離れ、「ゆうゆうと自分のペースで仕事を楽しむありかた」という意味に受けとめられる。

神谷美恵子氏は『生きがいについて』⁵⁾ という著書において、「新しい生きがいの発見」の章を著わしている。ここにも、「こころの奥行きの変化」「精神化」のテーマが論ぜられている。

読書会において、このような方向で話題がはずむとき、その会は充実した時間となる。私たちの話題はテキストのさらに先を論じることになるからである。「晩節を汚さず」や「禅譲」といった美しい言葉も登場してくるであろう。歴史の中に名を連ねた人々の生き方は、輝く晩年を考えさせる文化の遺産としてさまざまな美学を展開して見せてくれている。「晩年の美学」は、それだけ深く、議論のつきない話題性を秘めているということである。

■ おわりに

冒頭で、読書の深化を図るためには、素材読み、構造読み、主題読みの三段階が一般的に行われていることを述べた。さらに主題読みのあとに、私たちはもう一つの作業をする必要があるのではないかと考えてきた。それは、読者の知識や経験と作品の「重ね読み」であり、テキストと他の書物との読み合わせをする「比較読み」である。テキストで読んだことを、自分の生活と重ねて考察したり、他の書物と読み比べてみる。この営みを読書会における「発展読み」と考えよう、ということである。

発展読みは、テキストの内容、これまでに読んだ本、体験や知識などを一つの鍋に入れ、ぐつぐつと「読書ナベ」を煮ることである。この鍋料理をみんなで仕上げ、つつくのが読書会である。十人いれば十色の食材が投げこまれ、それぞれの具材は融合して絶妙な味を出す。これに勝るご馳走はそんなにあるものではない。

注

- 1) 曾野綾子著『晩年の美学を求めて』朝日新聞社 2006・4 pp.105-113
- 2) 深川賢郎著『読書会のすすめ』溪水社 2006・6 p.192
- 3) 深川賢郎著 上掲書 p.177
- 4) 神谷美恵子著作集3『こころの旅』みすず書房 1980・6 pp.150-153
- 5) 神谷美恵子著作集1『生きがいについて』みすず書房 1980・6 pp.95-203